

Truman Capote 著 *Summer Crossing*

—備忘録および若干の考察—

大 園 弘

はじめに

カポーティ (Truman Capote 1924-1984) の小説家としてのキャリアは、少なくともカポーティが亡くなる1984年までは、一般的に短編小説を量産した1940年代半ばにはじまり、処女中編 *Other Voices, Other Rooms* (1948)、*The Grass Harp* (1951)、*Breakfast at Tiffany's* (1958) の3つの中編小説、50年代の珠玉のエッセイ群、ノンフィクションの大作 *In Cold Blood* (1965) を経て、問題作 *Answered Prayers* (1987) に終わるものと捉えられているのではなかろうか。

だが、この認識は、*Summer Crossing* (2005) の刊行を機に若干の修正を求められることとなった。つまり、この遺作の原稿が2004年の秋に発見され、同時に執筆の経緯が明らかになりはじめると、カポーティの読者は、彼の創作活動のもっとも初期のころに、カポーティが早くもニューヨーク (マンハッタン) の社交界を素材にした作品の執筆に関心を寄せていたことに気づくのである。

ニューヨークを作品の主たる舞台としたカポーティのフィクションは少なくない。“Miriam” (1945)、“The Headless Hawk” (1946)、*Breakfast at Tiffany's* は言うに及ばず、*Answered Prayers* (1987) も然りである。しかし、ニ・ュ・ー・ヨ・ークの社交界を素材にした作品で思い当たるのは、かの悪名高き *Answered*

Prayers ぐらいではなかろうか。すなわち、カポーティの小説家としてのキャリアを振り返ると、テーマの違いはあるものの、そこにはニューヨークの社交界への関心(*Summer Crossing*)にはじまり、同じくニューヨークの社交界への関心(*Answered Players*)に行きつく偶然の一致が認められる。

本稿では、*Summer Crossing* の解釈(評価)に先立つ備忘録として、「遺稿発見の経緯」(Ⅰ節)・「*Summer Crossing* のアウトライン」(Ⅱ節)・「カポーティのニューヨーク生活と *Summer Crossing* 着想の背景」(Ⅲ節)・「*Summer Crossing* 執筆当時の葛藤」(Ⅳ節)・「若干の考察」(Ⅴ節)という各項目を整理しておきたい。

I 遺稿発見の経緯

2004年秋、カポーティの弁護士であり彼の死後 The Truman Capote Literary Trust の理事を務めるアラン・シュワルツ(Alan U. Schwartz)は、イギリスの国際的競売会社で現在はニューヨークに本部をおくサザビー(Sotheby's)から手紙を受け取る。それはカポーティの私物が競売にかけられようとしていることを知らせる手紙で、出版済みの作品の原稿、書簡、写真に加えて、未発表の作品の原稿と思しきものも含まれていると伝えていた。手紙には未発表原稿の1〜2ページの写真も含まれており、さらにはそれらの私物が発見された経緯がつぎのように記されていた。⁽¹⁾

1950年ごろ、カポーティはブルックリン・ハイツ(Brooklyn Heights)のアパートに住んでいたが、ある時期にアパートを不在にしたまま戻ってこないことに決め、彼は管理人に残した私物をゴミ収集に出してくれと頼んだという。通りに運び出された品々を見た守衛(house sitter)は、放っておかれるままにしておくようなものではないと思い、それらを保管しておいた。それから50年ほど経ったころ、守衛の死後、それらの品々を引き継いだ守衛の甥が競売にかけたいと望んだ。

この知らせを受けたシュワルツは、*Capote: A Biography*(1988)の著者ジェラルド・クラーク(Gerald Clarke)にそれらの品々をサザビーに鑑定にいてもらったところ、クラークは*Summer Crossing*の完全な原稿と思われるものを確認した。その後シュワルツはそれらの「遺品」をニューヨーク公立図書館(New York Public Library)に買収し保管してもらえようサザビーとの交渉を進めていくと同時に、自ら*Summer Crossing*の原稿に目を通し、妻ルイズ(Louise Schwartz)、ランダムハウス(Random House)のカポーティ担当の編集者デイヴィッド・エバーショフ(David Ebershoff)、同社副編集長ロバート・ルーミス(Robert Loomis)にも原稿を読んでもらった。その結果、「この作品はカポーティの記念碑的処女中編*Other Voices, Other Rooms*を書く前の若き小説家トルーマンに光をあてるものになるのではとの期待を抱いた。……この作品はそれ自身の真価によって自立できるほど十分に成熟しており、*Breakfast at Tiffany's*へと引き継がれていくのちのスタイルと技量の兆しがはっきりと表れている」⁽²⁾との結論に達した。シュワルツは慎重に考えた末、「作品自身に語らせるべきである。不完全ではあるものの、その驚くべき文学的成果は、これまでの拘束状態から解放されることを望んでいるように思えた。これは出版されるべきである」⁽³⁾と判断した。こうして*Summer Crossing*は2005年、ランダムハウスから出版されることとなった。

II *Summer Crossing* のアウトライン

Summer Crossing は6章構成となっている。以下、章ごとに物語のアウトラインをまとめておきたい。

(Chapter 1)

グレイディ・マクニール(Grady McNeil)は父ラモン(Lamont)、母ルーシー(Lucy)の次女である。17歳のグレイディには8歳年上で既婚の姉アップ

ル(Apple)がいる。季節は6月。マクニール家のこの4人はプラザホテルで朝食をとっている。その日、娘たちの両親は渡欧(Summer Crossing)することになっている。ニューヨークの酷暑を避けるためのマクニール家の恒例行事である。グレイディは、昨夏までは両親に同行していたが、今年の夏はニューヨークで過ごしたいと考えている。彼女には、何らかの思惑があるらしい。一方、ルーシーは、かつて自分がそうであったように娘にも華々しい社交界デビューを果たしてもらうために、グレイディを自分たちに同行させ、パリで彼女に似合うパーティドレスを新調してあげたいし、何よりも17歳の娘をひとり残して渡欧するのが心配である。

父ラモンが朝食の支払いを済ませているとき、ピーター・ベル(Peter Bell)がロビーを横切って近づいてくる。グレイディと幼馴染みのピーターは、ケンブリッジ大学で法律を学んでいたのだが、大学を追い出されたばかりだとグレイディに告げる。だが、ピーターには悪びれた様子もない。彼はグレイディと一緒にマクニール夫妻を波止場に見送りにいく。

(Chapter 2)

遡ること、同じ年の4月、グレイディはクライド・マンザー(Clyde Manzer)という青年と知り合っていた。その数か月前にマクニール家がマンハッタンのアパートからコネチカットに引っ越したため、グレイディは車でマンハッタンに出かけるときは、ブロードウェイ近くの駐車場に車を停めたのだが、クライドは4月のある日、その駐車場で働きはじめていた。グレイディが両親の渡欧に同行しなかったのはクライドに会うためだった。

クライドはグレイディよりも背が低く、「ハンサムではなかったが、不器量でもなかった。・・・均整のとれた体格で、しなやかさも備わっていた。・・・鼻が少し曲がっていて、そのために・・・力強さすら漂っていた。」⁽⁴⁾「クライド・マンザーは馬鹿どころか、とても頭が良かった。・・・どう逃げて、どこに隠れて、お金を払わずにどう地下鉄に乗り、映画を観るかを心得ていた。こ

うした知識は喧嘩の絶えない町の子供時代や、残忍な者、抜け目のない者、すばしっこい者、勇敢な者だけが生き残れるすさんだ午後から育まれるものだった。」(p. 33.)

「しかし、クライドはグレイディが知り合った最初の恋人ではなかった。」(p. 27.)彼女は16歳の頃、弁護士のスティーブ・ボルトン(Steve Bolton)、ジャネット(Janet)夫妻と知り合いになりスティーブに恋をした。彼女はしばしば夫妻の家に出入りし、ジャネットが出産したときには、身の回りの世話をしていた。だが、スティーブに対するグレイディの思いは、ジャネットの出産を境に薄れていった。

さて、両親も旅立ち、グレイディはクライドに会うために、彼が働く駐車場に向かう。クライドは駐車場の客の車の中でうたた寝をしている。クライドの軍隊時代の友人ミンク(Mink)がクライドのアルバイトを交代してくれることになっていて、ほどなくミンクが駐車場に現れる。「ミンクは突然変異で雄牛の大きさに成長した、太って小刻みに震える赤ん坊みたいで、目はとび出し、唇はだらりと垂れさがっていた。」(p. 36.)グレイディは着替えを済ませたクライドと出かける。

(Chapter 3)

グレイディとクライドは動物園に隣接するセントラルパークのカフェで過ごす。マクニール家のアパートは、動物園と反対側の5番街にあった。グレイディはクライドがセントラルパークに動物園があることを知らないことに愕然とする。彼女もクライドのことをよくは知らない。知っているのは、家族の人数と名前、数人の友人の名前(Mink, Bubble, Gump)ぐらいである。

グレイディはかつて興味本位でクライドの住むブルックリンを訪ねたことがあったが、そこは「幽霊の出そうならぶれた通り、似たようなバンガローが入り乱れた低地、空き地に、静まり返った空虚感」(p. 40.)が広がるばかりで、彼女はたまりかねてすぐに引き返したほどだった。

ランチが終わるとクライドは、弟のユダヤ教の成人式の「バル・ミツバー」の儀式への出席を理由に帰宅するとグレイディに伝えるが、結局、誘われるままにグレイディのアパートへ向かう。

いまは誰も住んでいないグレイディのアパートの部屋は広く整然としていて、家具類も豪華なものばかりだ。ピーターから電話がかかってくる。グレイディは7時に夕食の約束をして電話を切る。その後、グレイディとクライドは結ばれる。

グレイディはダンスホールで深夜までピーターと一緒に過ごす。ピーターは「この5時間ほど、自分がグレイディ・マクニールを愛していることを思い知らされていた。」(p. 50.)同時に彼はグレイディが誰かに恋をしていることにも気づいていて、彼女に「その人と結婚するつもりか」と尋ねるが、彼女は「ダンスするためにここに来たのよね。踊りましょう」(p. 55.)と言って、とりあおうとはしない。

ダンスを終え席に戻ってくると、ふたりは新聞社バンブークラブの報道係から取材を受ける。社交界の著名人マクニール氏の娘の特ダネを狙った取材である。ピーターは報道係から勝手に詩人ホイットマン(Walt Whitman)の孫に仕立てられる。

(Chapter 4)

後日、グレイディとクライドは彼女のアパートで遅い朝食をとっている。クライドが勤める駐車場が経営トラブルで閉鎖になっており、彼らは前日ミンクとその彼女で「陰気な感じのとても太った」(p. 63.)ウィニフレッド(Winifred)の4人で、車でピクニックに出かけ、帰りが明け方になったのだ。グレイディは「ミンクほどの醜男やウィニフレッドほど非常識な女は他に知らなかった」(p. 63.)という印象を抱く。

朝食にワッフルを焼いているグレイディに、クライドがドアマンから預かってきた2通の電報を手渡す。ヨーロッパの母からのものと、ピーターからのもの

のである。

グレイディがチョコレートケーキを作っているあいだ、新聞に目を通していたクライドはグレイディとピーターの写真が載っているのに気づいて気分を害し、「おまえ、こいつと婚約しているのか」と詰め寄る。グレイディは「幼馴染みよ」とだけ答えるが、そのタイミングでクライドは意を決したように「おれは婚約してるんだ」(p. 66.)と彼女に告げる。名前はレベッカ(Rebecca)だという。

動転したグレイディのもとに姉のアップルから電話がかかってくる。新聞に載った写真の件での非難の電話だったが、グレイディの心は、ここに在らずである。翌朝、アップルの家に泊まりにいくという約束をして、彼女は電話を切る。気分が重く落ち込んだままのグレイディは、自分の車の中でみつけたコンパクトをクライドに差し出して彼の反応を窺う。それはクライドの今は亡き発達障害の妹アン(Anne)のものだが、彼はそのことをグレイディには話さない。クライドがグレイディと知り合ったころ、彼女の車の調子が悪いことがあったので、クライドは自動車修理工場で働く友人ガンプのところに彼女の車を持ち込んだことがあった。知恵遅れのアンはガンプに恋心を抱いており彼の自動車工場に入りびたりだった。クライドはアンをグレイディの車に乗せてドライブしたのだが、そのとき、アンはコンパクトを車中に置き忘れたらしい。クライドはアンを自宅まで送り届けたが、帰宅時にアンは階段から転げ落ちて死んだのだった。

さて、グレイディがチョコレートケーキを作っているとき、かけっばなしのラジオから大歓声が沸き起こる。野球の試合で誰かがホームランを打った瞬間だった。クライドはラジオを消した。彼にとって「野球はつらい話題だった。」(p. 75.)かつて彼は草野球チームでノーヒットノーランを達成し注目を浴びたが、プロ野球からスカウトされることはなかった。母の望みは、彼に弁護士になってもらうことだったが、それも果たされることはなかった。彼はまた、テストパイロットになるために空軍部隊のトレーニングに申し込んだが、その野

望も学歴の低さのために阻まれてしまった。クライドは姉アイダ(Ida)に勧められるままに不承不承、小さなスーツケース工場を営む叔父のアル(Al)のもとで働きはじめるが、アルの一人娘で、クライドの従妹にあたるベレニス(Berenice)に執拗に言い寄られ、嫌気がさして数日のうちにその仕事もやめてしまっていた。その後のクライドは窃盗に手をそめるなど、自暴自棄の日々を送る毎日だった。駐車場のアルバイトを見つけたのはそんなころだった。

グレイディとクライドは映画を観にいくことにする。帰宅後、グレイディはアップルに翌朝の訪問取り消しの電話連絡を入れ、ふたりはニュージャージー、レッドバンクにドライブに出かけ、朝の2時ごろ、そこで結婚する。

(Chapter 5)

グレイディはクライドの自宅を訪ねている。ブルックリンでの彼の生活を見たいと思ったのである。クライドと結婚したことは伏せたままである。クライドの母マンザー夫人(Mrs. Manzer)は太っていて、疲れ果てて失望しているように見える。「マンザー夫人とクライドは、お互いの特徴や顔立ちが驚くほどそっくりだった。」(p. 84.) 夫人宅にはクライドの姉アイダとその息子バーニー(Bernie)、クライドの妹クリスタル(Crystal)もいる。彼らとは初対面のグレイディは、この家族に自分の家族には感じられない、何か奇妙で温かく、エキゾチックな雰囲気を感じる。その感覚は、彼女の個人主義的かつ冷静で排他的な気質にはしっくりこないものである。「確かに、マンザー家は家族だった。染みついた香りと使い古された家具からは、ありふれた生活感が漂ってきたし、家族の結束力はどんな騒動が起きようとも崩壊することはなかった。このような生活、これらの部屋は、彼らのものであり、彼らは深く結びついていて、クライドは本人が自覚する以上に彼らのものだった。」(p. 86.) グレイディは「彼らの生と死のリズムは小さいが、より集中して鼓動している」(p. 87.) ことに気づき、自分の住む世界とクライドの住む世界の異質性を知る。

アイダが突然レベッカの話題を持ち出す。レベッカは、クライドが婚約して

いると以前語っていた人物である。アイダは母に、その日の朝、A&P⁽⁵⁾でレベッカに出会ったとき、レベッカは何かに悩んでいて、「アイダ、あんたの弟に黙って立ち去れって伝えて」と言われたので、彼女はレベッカに「今日あたりうちにいっちゃい」(p. 89.)と伝えたという。それを聞いて、グレイディは衝撃を受ける。

そこへ、台所で冷蔵庫の修理をしていたクライドとクリスタルが居間に入ってくる。グレイディは不安な気持ちに襲われ、クライドに自分たちの関係を告白したほうがよいのではともちかけるが、彼はまだその時期ではないと答える。

やがて玄関のベルが鳴る。レベッカが到着したらしい。

(Chapter 6)

クライドはマクニール家のアパートの、かつてルーシーが使っていた部屋を自室として使い、週に3、4日は泊まるようになっていた。しかし、前日のクライド宅訪問の際の出来事以降、クライドからグレイディのもとに電話連絡がない。前日、レベッカがマンザー一家に訪ねてきた際、どうやらクライドはみんなに「こいつ、おれの妻」(p. 105.)とグレイディを紹介したようである。それを聞き、「哀れにもマンザー夫人は泣き、アイダは叫び、そしてクライドは(グレイディに)帰れよ。あとで電話するから」(p. 99.)と伝えていたのである。その一幕以降、クライドからは何の一報も入ってこないままである。

グレイディが悶々と時を過ごしていると、そこへピーターが訪ねてくる。彼の訪問はグレイディに自分がしたことの意味、ピーターと自分の関係、今後のことを問い直すきっかけとなる。やがて、ピーターは帰っていく。

クライドからは依然として連絡がない。グレイディはたまらず真夜中のドライブに出かける。

クライドはクライドで例的一幕の直後に家をとび出していた。彼はナイトクラブでバーテンダーとして働いている友人のバブルのアパートに身を寄せていた。4日ほどが経ち、クライドはグレイディに会いたくなって電話をかけるも

応答がない。その前日、クライドはガンブと街で大騒ぎし、彼にマリファナを吸わせてもらった。その勢いでクライドはガンブに勧められるまま入墨師にグレイディの名前をアルファベットで手首に彫ってもらっていた。その痛みを感じながら、クライドはグレイディのアパートに向かう。

グレイディのアパートのドアマンは、彼女はアパートにいないとクライドに伝えるが、エレベーターボーイのレスリー (Leslie) は、グレイディが姉のアップル宅に滞在しているところを教えてくれる。

グレイディは海岸沿いに建つアップルの家に滞在して以降、毎朝ランチボックスを携えて海岸へ向かい、日没まで浜辺で過ごしている。彼女は妊娠6週目と診断されていたが、そのことはまだ誰にも話していない。両親はひと月以内に帰国予定である。ある日、浜辺から姉宅に戻ってくると、グレイディはアップルから、「クライド・マンザーって誰なの」(p. 115.)と尋ねられる。グレイディが不在中に、クライドとガンブがアップル宅を訪ねていたのだ。アップルがクライドに「妹の友達ですか」と尋ねると、クライドは「グレイディの夫です」(p. 116.)と答えたのだという。グレイディは「それはピーターのつまらない冗談よ。クライド・マンザーはピーターの大学の友達なの」とごまかそうとするが、彼女は姉のさらなる追求に屈し、「私たち、2か月ほど前に結婚したの」(p. 117.)と白状する。グレイディはアップルに3週間だけ猶予がほしい、誰にも内緒にしてほしいと懇願し、アップルから教えられたクライドの居場所であるレストランに向かう。

レストランにはクライドとガンブがいる。三人はグレイディの車でニューヨークのバブルが働くナイトクラブへ向かう。クライドとグレイディはバンドの演奏に合わせて踊る。そこへピーターがやってきて、グレイディを連れて帰ろうとする。ピーターはグレイディのバッグをひつつかむ。クライドはそのバッグを強引に奪い返す。そのとき、グレイディは初めてクライドの手首に自分の名前が彫られていることに気づき、ピーターに向かって「クライドは自分を傷つけたのよ。私のために」(p. 124.)と言う。男同士の喧嘩の場面をグレイディ

に見せてはならないとのバンドのギタリストの配慮から、そのギタリストは彼女を化粧室に連れていき、裏口から外に出られると伝える。

グレイディは自分の車がないのに気づき、あたりをさまよう。やがて彼女はガンプが運転する自分の車と出くわす。バックシートにはクライドと顔から血を流したピーターがうずくまっている。「ガンプとクライド、ピーターさえもが、言葉も声もともなわない狂気で一体となっていた—クライドの拳の有無を言わさぬ一撃のなかに、友情が芽生えていたのであった。」(p. 126.)

Ⅲ カポーティのニューヨーク生活と *Summer Crossing* 着想の背景

Summer Crossing がニューヨークの社交界に素材を得ていることは前節のとおりである。本節ではアメリカ南部生まれのカポーティが生活の拠点をアラバマ州モンローヴィルからニューヨークに移して以降、短編小説を量産した1945年ごろまでの足跡をたどりながら、*Summer Crossing* 着想の背景をさぐってみたい。

カポーティのニューヨーク生活は、両親の離婚調停にともなう彼の養育権をめぐる法廷での尋問を経て母リーリー・メイ(Lillie Mae)が完全な養育権を認められた1932年8月24日以降である。^⑥当時8歳だったカポーティは、ブルックリンの戸建ての家で両親と暮らしはじめた。以後、数回の転居と夏期休暇中の故郷モンローヴィルへの「里帰り」を除き、カポーティの生活の拠点は東部におかれることになる。^⑦

1933年秋、9歳になったころ、カポーティは両親とともにブルックリンからマンハッタンのリバーサイド・ドライブに転居し、男子校トリニティー・スクールの4年生に編入する。3年後の1936年秋、男の子らしく成長してほしいとの母の思いから、12歳のカポーティはセント・ジョーンズ・ミリタリー・スクールに転校させられる。しかし、校風が肌に合わず、1年後、彼はトリニ

ティー・スクールに復学する。

1939年6月、カポーティが14歳のとき、カポーティと両親はマンハッタンからコネチカット州グリニッチ、ミルブルック地区オーチャード・ドライブに引っ越し、15歳になった9月、カポーティはグリニッチ高校に10年生として入学する。グリニッチで彼は約3年間を過ごすのであるが、この言わば「グリニッチ時代」は、小説家トルーマン・カポーティを育む貴重な数年間だった。カポーティはこの「グリニッチ時代」に少なくともふたつの重要な「出会い」を体験している。フィービー・ピアス(Phoebe Pierce)との出会いと教師キャサリン・ウッド(Catherine Wood)との出会いである。

カポーティは、グリニッチ高校でフィービー・ピアスと親しくなった。⁽⁸⁾どちらも母親がアルコール中毒であること、作家になる夢を抱いていること、このふたつの共通点が両者の絆を強固にした。週末になるとふたりは、電車で45分かけてマンハッタンにでかけ、エル・モロッコなどの高級ナイトクラブに潜入していたという。⁽⁹⁾

グリニッチ時代にカポーティが出会ったのはフィービーだけではなかった。グリニッチ高校の国語教師キャサリン・ウッドはカポーティの文筆家としての才能と可能性に着目し、彼が書いたものを読んであげたり、彼中心の授業をしたり、彼を夕食に招いたりするなど、カポーティを特別扱いした。またある時は、カポーティの母親に彼には有望な将来が待ち受けていることを請け負ったこともあったという。⁽¹⁰⁾カポーティにとって、キャサリン・ウッドは精神的にも実質的にも心強い存在であったに違いない。

このように、「グリニッチ時代」のフィービー・ピアスとキャサリン・ウッドとの出会いは、カポーティにとって、言わば良き理解者との出会いであり、クラークが述べているように、まさに「グリニッチで、彼の才能は開花したとは言わないまでも、芽を出しはじめた」⁽¹¹⁾のである。

1942年6月、カポーティ一家はグリニッチからニューヨークのアッパー・イーストサイド、パークアヴェニュー82丁目のアパートに転居し、カポーティ

はウエストサイドの私立フランクリン高校に編入する。彼はそこで「終始新聞のコラムに取りあげられる3人の娘」⁽¹²⁾と親しくなる。のちに小説家ウィリアム・サロイアン(William Saroyan)の妻となるキャロル・マーカス(Carol Marcus)、こちらのちにチャーリー・チャップリン(Charlie Chaplin)の妻となるウーナ・オニール(Oona O'Neill)、鉄道王ヴァンダービルト(Vanderbilt)家の娘グロリア(Gloria)の3人である。カポーティを含むこれら4人組は、エル・モロッコやストーク・クラブなどの高級ナイトクラブに入りびたりだったという。クラークは、「ついにトルーマンは自分が望むくつろぎの場所を見つけた。ニューヨークはおもしろく、エキサイティングで魅力に満ちていた」⁽¹³⁾と述べている。カポーティは、この「フランクリン高校時代」にニューヨークの上流社会を垣間見る機会を得たのである。

さて、カポーティはブルックリン高校在学中の1942年の暮れ、もしくは43年の初めのころ、当時戦時下で人手不足だった「ニューヨーカー」(*The New Yorker*)でコピーボーイのアルバイトに就く。18歳のときであった。*Summer Crossing* の執筆を開始したのも1943年だった。⁽¹⁴⁾同年の秋には、執筆に専念するために「ニューヨーカー」を辞め、モンローヴィルに戻る。だが、数週間も経たぬうちに彼はニューヨークに戻り、「ニューヨーカー」にも「復職」する。

翌44年、20歳の夏、「ニューヨーカー」を蹴になったカポーティは、継父ジョー(Joseph Capote)の経済的支援のもと、本格的に作家としての生活を開始する。クラークはこのころを「トルーマンが自分の本当の声、作家としての明確なスタイルをまさに見出しはじめていたときである」⁽¹⁵⁾と述べている。

同年冬、カポーティは *Summer Crossing* を書きあげるために、再びモンローヴィルに戻る。しかし、故郷で過ごすうちに、ニューヨークの社交界とそのそとの世界に生きる若者たちの葛藤を描いたこの「処女作」への彼の関心は次第に失せていく。そして、「*Summer Crossing* は、私にはますます貧弱で、才走った実感のないものに思われた。新たな別の言語、秘密の精神地図のようなものが私のなかで芽吹き、目覚めているときの白昼夢だけでなく、夜の夢の時間ま

で占有した。・・・私は興奮― 一種の創造的陶酔状態―におそわれた。・・・私は〔叔母のルシールに〕おやすみを言うと、*Summer Crossing* の原稿を机のいちばん下のひきだしに放りこみ、先のとがった鉛筆を何本かと新しい黄色の線の入った原稿用紙の新しい束をとり出し、服を着たままベッドにもぐりこみ、パセティックなオプティミズムをもって書いた〈『遠い声 遠い部屋』―トルーマン・カポーティ作〉。⁽¹⁶⁾まさに、*Other Voices, Other Rooms* の着想が *Summer Crossing* を脇に押しのける格好となった。

その後、カポーティは、*Other Voices, Other Rooms* の執筆に専念するために、1945年1月、ニューオーリンズのフレンチ・クォーターのアパートで数か月間暮し、同年春にはニューヨークへと戻っていく。文学的野心を抱いて彼が目に向けた先は、「ニューヨーカー」ではなく、「マドモアゼル」(*Mademoiselle*)、「ハーパーズ・バザー」(*Harper's Bazaar*)といった女性向けファッション雑誌の文芸欄であった。

彼の“My Side of the Matter”、“Miriam”、“Jug of Silver”はいずれも1945年に「マドモアゼル」に、“A Tree of Night”は同年「ハーパーズ・バザー」に掲載され、このうち“Miriam”は1946年にオー・ヘンリー賞を受賞している。このように、1945年は小説家トルーマン・カポーティにとって記念すべき1年となった。

さて、前節で *Summer Crossing* のアウトラインを眺めたわけだが、物語の主人公は言うまでもなくグレイディである。しかし、作品のなかのグレイディは、少なくとも両親や姉のアップルが期待するような、上流階級の娘に相応しい考え方や行動ができるような女性ではない。むしろ彼女は、その思考や行動内容から判断する限りでは、自分が属する上流階級の世界に反抗、もしくは挑戦しているようにすら感じられる。そのようなグレイディの性向には、*Answered Prayers* の P.B. Jones のそれに通じる部分すら感じることができる。

ではカポーティは、どこからグレイディのような人物を造形するヒントを得

たのであろうか。

本節で辿ってきたカポーティの初期のニューヨーク時代との関連からすれば、彼は、「グリニッチ時代」のフィービー、「フランクリン高校時代」のキャロル、ウーナ、グロリアらとの交友からグレイディ像の着想を得たと考えるのが自然である。彼女たちと一緒にマンハッタン的高级ナイトクラブに通う生活のなかで、カポーティは年齢的にまさに大人の仲間入りを迎えようとする同世代の彼女たちの行動に秘められた複雑な心理を垣間見たのではないだろうか。

IV *Summer Crossing* 執筆当時の葛藤

本稿第I節でみたように、*Summer Crossing* はカポーティがかつて住んでいたブルックリン・ハイツの当時の守衛が廃棄を頼まれたカポーティの私物を保管していたために、執筆開始から60年以上もの歳月を経て出版の陽の目をみた。しかし、この作品の出版は、もちろん、カポーティの望むところではなかった。

カポーティは1943年ごろから *Summer Crossing* を書きはじめた。その数年後に *Other Voices, Other Rooms* の着想を得ると、たちまち彼は *Summer Crossing* の執筆を中断した。それから、1948年に *Other Voices, Other Rooms* が出版されると、彼は *Summer Crossing* の執筆を再開した。カポーティの書簡集⁽¹⁷⁾によると、それは明らかである。またカポーティがブルックリン・ハイツを去ったのが1950年ごろであり、彼が廃棄を要請した私物のなかに *Summer Crossing* の原稿が含まれていたことを考え合わせると *Other Voices, Other Rooms* を刊行して2年ほど経ったころには、*Summer Crossing* が書きあげられていたことになる。⁽¹⁸⁾

では、カポーティは書き上げた原稿を—それが草稿だったとしても—なぜ葬り去ったのだろうか。

本節では、カポーティが *Summer Crossing* の執筆を再開した1949年ごろの

この作品をめぐる彼の葛藤を、カポーティが当時、知人に宛てた手紙類を手がかりにして探してみたい。

カポーティは1949年2月末、当時知り合ったばかりの愛人ジャック (Jack Dunphy) と一緒に渡欧し、同年12月に帰国している。彼はこの約10か月間で、滞在地のイスキア (イタリア)、パリ、タンジール (モロッコ) から知人に35通ほどの手紙を書き送っている。このうち、*Summer Crossing* に言及した手紙は11通である。それらの手紙の多くには下掲のように、*Summer Crossing* に注ぐカポーティの情熱や期待感と同時に、果たして書き上げることができるのかという彼の焦燥感や不安感が吐露されている。

「*Summer Crossing* には大いに期待を抱いています。執筆していると生き生きと感じますし、やるべきことをやっていると感じます。しかし、気が休まることはありません。それは多分、良い兆候なのでしょう。またこの本のことは誰にも話したくありません。それもまた良い兆候です。」
(1949年4月1日)⁽¹⁹⁾

「私の本 [*Summer Crossing*] は、あなたにその本の概略を話して以降、幾分、変わりました。私のスタイルは成長したと実感しています(妄想かもしれませんが)。・・・素材とそれに対する私の見方は、以前、目指していたものとは異なっています。まったく、何と不快な混乱状態なのでしょう。」 (1949年5月)⁽²⁰⁾

「現在取り組んでいる章を終えたら、全体の3分の1を終えたことになります一順調だと思いませんか。帰国前に草稿を仕上げることができれば、来年の初めまでには、多分、推敲が終わると思います。そうすれば、来年6月には出版できるでしょう一つまり、あなたに出版の意向があればの話

ですが—これまでのところ、この作品〔*Summer Crossing*〕は私がこれまで取り組んできたなかでも一番困難なものです。」(1949年5月6日)⁽²¹⁾

「私の実際の生活は、完全にこの本〔*Summer Crossing*〕中心になってしまったようです。始まりと終わりが見えない状況です。」(1949年5月17日)⁽²²⁾

「私の本〔*Summer Crossing*〕を勢いよく書き進めています。現在、少なくとも、草稿で3分の2を書き終えたところです。気に入っているところもあれば、もちろん、そうでないところもあります。およそ、80,000字ほどになりそうで、予想よりもはるかに長いです。しかし、私が当初計画していたのとは全く異なり、かつ、無限と思えるほどに複雑なものに変わってしまいました。かたちあるものに仕上げるには、とてつもない努力が必要になります。」(1949年8月30日)⁽²³⁾

これらの手紙の文面からは、渡欧中、カポーティが並々な努力と熱意をもって *Summer Crossing* の執筆に取り組んでいるということ、そして熱心に取り組めば取り組むほど、先行きの見えない混乱の度合いが強まってくるという彼の苦悩が窺われる。

小説家にとって、このようなジレンマは何よりも耐え難いものであるに違いない。だが、この葛藤は、カポーティが小説家として成長したことの証であると観ることができるであろう。彼は、友人のリンドン(Andrew Lyndon)に宛てた上掲の手紙のなかで、「私のスタイルは成長したと実感しています」と綴っている。1940年代半ばに優れた短編小説を量産し、1948年に処女中編小説 *Other Voices, Other Rooms* を刊行したカポーティは、その創作活動を経て、作家として大きく成長した。そのカポーティが1943年に着手した *Summer Crossing* の執筆を約6年ぶりに再開したとき、「素材とそれに対する私の見方が以前目

指していたものと異なって」感じられ、「当初計画していたのとは全く異なり、かつ、無限と思えるほどに複雑なものに変わってしまった」のは、むしろ、当然の帰結である。悩みに悩んだ挙句、カポーティは *Summer Crossing* に見切りをつけた。彼にこの決断を促したのは、小説家としてのプライドと次作 *The Grass Harp* の着想だったのかもしれない。⁽²⁴⁾

V 若干の考察

本稿の結びにかえて、本節では *Summer Crossing* の文体上の特徴とタイトルの多義性にふれたい。文体上の特徴については、カポーティの他の作品にもみられる類似の文彩(rhetoric)、とりわけ直喩(simile)と押韻(rhyme)面がこの「遺稿」にも見てとれるということを事例で示す。タイトルの多義性については、“Crossing” (「交叉」)に読み取ることのできる幾つかの意味合いを指摘したい。

カポーティの諸作品に多種多様な文彩が用いられているという事実は、拙著『カポーティ小説の詩的特質』で明らかにしたとおりである。⁽²⁵⁾ 比喩標識 “like” “as” “as if (as though)”などを備えた直喩をはじめ、“as～as”の強意的直喩(intensifying simile)、隠喩(metaphor)など、そのヴァリエーションは多岐にわたり、カポーティはこれらの比喩表現を用いることで作品中の場面場面に独特な雰囲気醸し出すのに長けている。下掲の引用文①は、“A Tree of Night”から取りあげた一例である。夜の駅舎のひさしから垂れた氷柱が「水晶でできた化け物の牙」に喩えられており、凍てつく吹きさらしの駅の荒涼感と不気味さを伝えている。引用文②は、“The Headless Hawk”からの引用である。真夏のむしろ暑さと雨の気配が夕方のマンハッタンを包み込み、通りを歩くヴィンセントの意識を朦朧とさせる。作者はヴィンセントの鈍化した感覚を伝えるべく3つの直喩を巧く用いている。「ヴィンセントは海中を彷徨ってい

るような感覚に襲われた」という第一の直喩を受けて、5番街を行きかうバスが「緑色の腹の魚」に、通行人の顔が「波に漂う仮面」に喩えられている。一つの直喩がつぎの直喩へと有意味につながる、言わば直喩の連鎖の見事な事例である。③は *Summer Crossing* 第4章からの引用である。映画館を出たグレイディとクライドが、夜中のレキシントン街を歩いている場面である。星の見えない夜空が「棺の蓋」に喩えられたこととの関連で、街路が長く伸びて横たわったままの死体」になぞらえられている。②の引用例同様、直喩の連鎖である。

このように、*Summer Crossing* には、のちのカポーティ作品にみられるのと同質の巧みなレトリックが見受けられる。

① It was winter. A string of naked light bulbs, from which it seemed all warmth had been drained, illuminated the little depot's cold, windy platform. Earlier in the evening it had rained, and now icicles hung along the station-house eaves like some crystal monster's vicious teeth. (強調筆者 以下同)⁽²⁶⁾

② A promise of rain had darkened the day since dawn, and a sky of bloated clouds blurred the five o'clock sun, it was hot, though, humid as tropical mist, and voices, sounding along the gray July street, sounding muffled and strange, carried a fretful undertone. Vincent felt as though he moved below the sea. Buses, cruising crosstown through Fifty-seventh Street, seemed like green-bellied fish, and faces loomed and rocked like wave-riding masks.⁽²⁷⁾

③ It was wilting out on Lexington Avenue, and especially so since they'd just left an air-conditioned theater; with every step heat's stale breath yawned in their faces. Starless night-fall sky had closed down like a coffin lid, and the avenue, with its newsstand of disaster and flickering fly-buzz sounds of neon,

seemed *an elongated, stagnant corpse*. The pavement was wet with a rain of electric color; passersby, stained by these humid glares, changed color with chameleon alacrity: Grady's lips turned green, then purple. (pp. 78-79.)

つぎに押韻の事例をみておこう。カポーティはグローベル(Lawrence Grobel)のインタビューのなかで、「私はこれまでずっと、自分には言葉の束をつかみ、それらを空中に放りあげると、ちゃんと纏まりあるものとなって落ちてくる才能があると気づいていた」⁽²⁸⁾とも「私は耳を使って書くことが多い。私は言葉のトーンにすごく耳を傾けるのだが、このことにとても注意深くならざるを得ない。なぜなら、私は言葉が内容に相応しいかどうかよりも専ら音の響きのために用いることがあるからだ」⁽²⁹⁾とも述べている。この発言を実証するかのように、カポーティの作品には「音」や「リズム」を意識した文章が散見できる。下掲の④⑤⑦は拙著でも取りあげた事例である。⑥は前項の②で引用したものであるが、直喩と押韻が織り交ざった興味深い事例となっている。⑧～⑰は *Summer Crossing* から取りあげたごく一部の押韻事例である。個別のコメントは省略するが、これらの事例には、押韻面でものちのカポーティ作品に通じる類似の特徴が見てとることができる。

④ 頭韻事例 “h” [h]

Radcliff honked and honked the horn at a tribe of hogs....(強調筆者 以下同)⁽³⁰⁾

⑤ 脚韻事例 “ng” [ŋ]

In the country, spring is a time of small happenings happening quietly, hyacinth shoots thrusting in a garden, willows burning with a sudden frosty fire of green, lengthening afternoons of long flowing dusk, and midnight rain opening lilac;
...⁽³¹⁾

⑥ 複数の頭韻事例 “d” “bl” “s” “cr” “f”

A promise of rain had darkened the day since dawn, and a sky of bloated clouds blurred the five o'clock sun, it was hot, though, humid as tropical mist, and voices, sounding along the gray July street, sounding muffled and strange, carried a fretful undertone. Vincent felt as though he moved below the sea. Buses, cruising crosstown through Fifty-seventh Street, seemed like green-bellied fish, and faces loomed and rocked like wave-riding masks.

⑦ 複雑な押韻事例「視覚韻 “Th/th” + 「頭韻 “d/g/j” + 「子音韻 “l(l)”」

There were three deliveries daily, and this sizable group gathered at the post office for all of them, a jolly crowd growing gradually joyless.⁽³²⁾

⑧ In the McNeil apartment it was as if a vast snow had fallen, hushing the great formal rooms and shrouding the furniture in frosty drifts...(p. 45.)

⑨ From the balcony she could see steeples and pennants far over the city quivering in a solution of solid afternoon...(p. 47.)

⑩ Her everyway hair was like a rusty chrysanthemum, petals of it loosely falling on her forehead, and her eyes, so startlingly set in her fine unpolished face, caught with wit and green aliveness all atmosphere.(p. 51.)

⑪ Wrapped in a towel, he flung open the door; and Bernice, backing blindly into a corner, had stood mute and hangdog while he heaped on her a vast dirt of army swear-words;...(p. 77.)

⑫ Clyde lingered after the others: dim, at a distance, a statue; his shirt uas

silk-wet with sweat and pasted to him like a thin plating of marble. (p. 90.)

⑬ For minutes, like a circulating presence, the sour sweet sweat smell of him stayed in the air, ... (p. 91.)

⑭ He was a whiny, worm-white, un willing child, with banged-up bandaged knees, a baldly haircut and daredevil eyes. (p. 92.)

⑮ ... its summer coverings were stripped back, a spilled ashtray sprawled on the silver rug, ... (p. 97.)

⑯ ..., we are protesting in ways both frivolous and deep against the not to be diluted dullness of day-to-day living. (p. 113.)

⑰ She fled down to Third Avenue, where the slowly swinging headlights of a car struck her starkly. (p. 125.)

最後にタイトルの多義性についてふれておきたい。*Summer Crossing* は2006年9月、安西水丸の訳でランダムハウス講談社より翻訳書が出版された。その訳書の邦題は『真夏の航海』である。物語は、上流階級のマクニール夫妻が渡欧中に、夫妻の次女グレイディが両親不在のニューヨークで体験するひと夏の出来事をめぐって展開しており、両親の渡欧(航海)、すなわち、両親の不在は、グレイディのひと夏の冒険を実現するための、言わば状況設定にすぎない。その意味で言えば、『真夏の航海』という邦題は物語の実態とズレがあるとの印象を受ける。換言すれば、原作のタイトル“Crossing”は、安西の翻訳書のあとがきの表現を借りれば、「主人公たちが行き交う、マンハッタンとブルックリン。また登場人物に見る人間関係。小説のなかで、さまざまな交叉が展開

して」⁽³³⁾いるさまを示唆している。

では、「さまざまな交叉」にはどのようなものがあるだろうか。

まず、その一つは、安西の言う「マンハッタンとブルックリン」の交叉である。この交叉は、グレイディとクライドの交叉であり、同時に、上流階級と下層階級の交叉を意味する。グレイディが初めて訪れたクライドの住むブルックリンは、「幽霊の出そうなうらぶれた通り、似たようなバンガローが入り乱れた低地、空き地に、静まり返った空虚感」が漂う空間であった。駐車場のアルバイトで日銭を稼ぐクライドの友人たちは、ミンク(Mink)、バブル(Bubble)、ガンプ(Gump)などの冴えない愛称で呼び合う。このほか、グレイディの属する上流社会とクライドの属する下層社会のコントラストは物語のいたるところに散りばめられている。そのグレイディがクライドに魅かれ、クライドがグレイディに魅かれるという関係性はまさに上流階級と下層階級の交叉に他ならない。

つぎに注目したいのは、母ルーシーと娘グレイディの思惑(意識)の交叉である。娘に華々しい社交界デビューを果たしてもらいたいというルーシーの思いは、上流階級層の伝統であるとは言え母親サイドの一方向的な願望である。一方、グレイディは社交界デビューのパーティの出席があり得ないことを明言している。母娘のこの思惑(意識)のズレ(交叉)は、少なくとも母親の側に、母一娘という関係性よりも社会的立場や因襲の方を優先して当然だとの思いが強いことから生じている。このことは、物語の第1章で明示されている。グレイディにしてみれば、そうした社会的立場や因襲は、束縛以外の何ものでもない。彼女が自分とは対極に位置する下層階級に属するクライドに魅かれるのは、このような束縛への反抗とも解釈できるであろう。

さて、グレイディは18歳の誕生日を迎える2か月前の、17歳の女性として設定されている。年齢上のこの設定に「交叉」の意味を読み取るとすれば、それは成人前の女性と成人女性との「交叉」である。物語の最終章で、グレイディは姉のアップルに2か月ほど前にクライドと結婚したと告白する。それを聞いて

たアップルは、「当然それは合法的じゃないわ。あなたは18歳でも21歳でもないのよ。〔夫の〕ジョージだってそう思うはずよ」(p. 117.)と述べる。グレイディとクライドの結婚が合法的ではないというアップルの主張は、一般論として正しいであろう。しかしグレイディが妊娠6週目であると設定されていることとの関連で考えれば、そこには明らかに成人前の女性と成人女性との「交叉」が象徴的に物語られている。⁽³⁴⁾

最後に物語のエンディングに注目したい。グレイディ、クライド、ガンプの3者が、バブルが働くクラブで酒を飲んでいるところへ、ピーターがやってくる。クライドとピーターは殴り合いの喧嘩となる。グレイディの幼馴染ピーターと彼女の現在の恋人(夫)とのあいだのぶつかり合い(交叉)である。グレイディという一人の女性をめぐるの、上流階級の青年と下層階級の青年との闘い(交叉)である。だが、この「交叉」の結末は意外なものである。闘いのあとの二人は「言葉も声もともなわない狂気で一体となっていた—クライドの拳の有無を言わさぬ一撃のなかに、友情が芽生えていた」のである。上流階級のピーターと下層階級のクライドは、階級の違い(交叉)を超えて一体となった瞬間だった。

カポーティ自身が上流社会にあこがれつつも、その社会を軽蔑視していたことは、彼の晩年の作品である *Answered Prayers* が物語っているとおりである。上流社会に対するカポーティのアンビヴァレントな視点は、彼の最も初期の作品 *Summer Crossing* において、ピーターとクライドとのあいだの衝突と和合といった関係性にも見てとれるように感じられる。

注

- (1) Alan U. Schwartz, Truman Capote 著 *Summer Crossing*, (New York: Random House, 2005)の “Afterword” 参照。
- (2) Schwartz, p. 136.
- (3) Schwartz, p. 137.
- (4) Truman Capote, *Summer Crossing*, (New York: Random House, 2005) p. 27.

以下、本書からの引用は、引用文のあとに括弧を付し、ページ数を記す。

- (5) 米国スーパーマーケット会社およびそのチェーン店 Great Atlantic and Pacific Tea Company の略。
- (6) カポーティの母リリー・メイは、キューバ人の実業家ジョーゼフ・ガルシア・カポーティ (Joseph Garcia Capote) と1932年3月24日に再婚した。
- (7) ちなみに、カポーティがトルーマン・ストレックファス・パーソンズ (Truman Streckfus Persons) からトルーマン・ガルシア・カポーティ (Truman Garcia Capote) に改姓したのは、継父ジョーが正式に親権を認められた1935年2月14日以降である。
- (8) カポーティはプロポーズしたことがあるほどフィービーに魅かれていた。Gerald Clarke, *Capote: A Biography*, (New York: Simon & Schuster, 1988) p. 64.
- (9) クラークは、ふたりにとって週末のマンハッタン行きは「それぞれの家庭の醜悪な場面からの逃避だった」と述べている。Clarke, *Capote: A Biography*. p. 59.
- (10) 同書、p. 53.
- (11) 同書、p. 54.
- (12) 同書、p. 68.
- (13) 同書、p. 68.
- (14) Robert Emmet Long, *Truman Capote—Enfant Terrible*, (New York: Continuum, 2008) p. 33.
- (15) Clarke, p. 78.
- (16) Truman Capote, "A Voice from a Cloud," in *The Dogs Bark: Public People and Private Places*, (New York: Random House, 1973) pp. 6 - 7.
- (17) Gerald Clarke (ed.), *Too Brief a Treat: The Letters of Truman Capote*, (New York: Vintage Books, 2004)
- (18) カポーティは1953年6月19日に「ハーパーズ・バザー」のファッション担当編集者のアズウェル (Mary Louise Aswell) に宛てた手紙の中で「'Summer Crossing' は、かなり以前に破棄しました—とにかく、完成には至らなかったのです」と書いているが、「完成には至らなかった」というのは「未完に終わった」という意味ではなく、草稿はできたが、満足のいく出来栄には至らなかった」という意味であると筆者は捉えている。Clarke, *Too Brief a Treat*, p. 216. 参照。
- (19) Random House の副編集長 Robert Linscott に宛てた手紙。Clarke, *Too Brief a Treat*, p. 73.
- (20) 友人 Andrew Lyndon に宛てた手紙。Clarke, *Too Brief a Treat*, p. 79.
- (21) Linscott に宛てた手紙。Clarke, *Too Brief a Treat*, p. 80.
- (22) Lyndon に宛てた手紙。Clarke, *Too Brief a Treat*, p. 85.

- (23) Linscott に宛てた手紙。Clarke, *Too Brief a Treat*, p. 99.
- (24) カポーティが *The Grass Harp* の執筆をはじめたのは1950年である。
- (25) 大園弘、『カポーティ小説の詩的特質―音と文彩』（春風社、2016年）
- (26) Truman Capote, *The Selected Writings of Truman Capote*, (New York: Random House, 1963)p. 3.
- (27) 同書、p. 31.
- (28) Lawrence Grobel, *Conversations with Capote*, (New York: New American Library, 1985)p. 83.
- (29) 同書、p. 91.
- (30) *Other Vices, Other Rooms* からの引用である。この引用文の押韻上の特徴と効果については、大園弘、『カポーティ小説の詩的特質―音と文彩』（春風社、2016年）pp. 47-48. を参照のこと。
- (31) “The Headless Hawk” (1946)からの引用である。この引用文の押韻上の特徴と効果については、大園弘、『カポーティ小説の詩的特質―音と文彩』 pp. 40-42. を参照のこと。
- (32) “Children on Their Birthdays” (1948)からの引用である。この引用文の押韻上の特徴と効果については、大園弘、『カポーティ小説の詩的特質―音と文彩』 pp. 46-47. を参照のこと。
- (33) トルーマン・カポーティ、『真夏の航海』（安西水丸訳、ランダムハウス講談社、2006年）p. 209.
- (34) カポーティが *Summer Crossing* を書きはじめた1943年、彼は *Decade of Short Stories* というジャーナルに “The Walls Are Cold” という非常に短い短編小説を発表している。カポーティの存命中、どの選集にも収録されなかった作品である。この作品も *Summer Crossing*に通じるような内容である。上流社会に属する16歳のルイズ(Louise)は両親不在のある晩、自宅でパーティを開く。30名ほどの客が出入りする。彼女はそのうちの一人で初対面のジェイク(Jake)に魅かれる。初対面のミシシッピ出身の水兵である。逞しい男性の腕に抱かれて大人の女性へのイニシエーションを体験したいというのがルイズの予てからの願望である。だが、彼女は自らジェイクを寝室に招き入れたにもかかわらず、いざ彼の抱擁を受けると、それ以上の関係を拒絶し母親の寝室に閉じこもる。16歳の彼女は、大人の女性へのイニシエーションは果たすことができずじまいである。18歳を目前にしたグレイディの2年前を思わせるような作品と言えるであろう。

参考文献

- 大園弘、『カポーティ小説の詩的特質—音と文彩』（春風社、2016年）
- トルーマン・カポーティ、『真夏の航海』（安西水丸訳、ランダムハウス講談社、2006年）
- Capote, Truman. "A Voice from a Cloud," in *The Dogs Bark: Public People and Private Places*, (New York: Random House, 1973)
- . *Summer Crossing*, (New York: Random House, 2005)
- . *The selected Writings of Truman Capote*, (New York: Random House, 1963)
- Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*, (New York: Simon & Schuster, 1988)
- Clarke, Gerald (ed.). *Too Brief a Treat: The Letters of Truman Capote*, (New York: Vintage Books, 2004)
- Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*, (New York: New American Library, 1985)
- Long, Robert Emmet. *Truman Capote-Enfant Terrible*, (New York: Continuum, 2008)